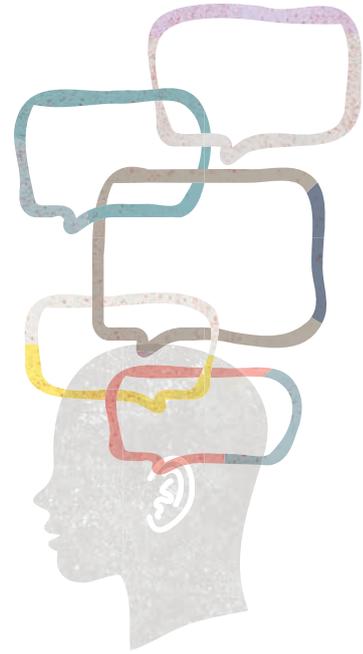


# 「話をきく会」の話

小川 稔



印象的な写真がある。広い庭の斜面、植え込みの間から100人に近い人の顔、男も女もこちらを見ている。これは昭和5年4月、塩尻洗馬村長興寺で撮られた記念写真で、真ん中には民俗学の柳田國男がいる。この会は「話をきく会」といい、松本の呉服商池上喜作(百竹亭)と銀行員で歌人でもあった胡桃澤勘内くるみざわかんないが始めた。その趣意書に「私達の話し度いと云ふ欲望は、殆んど無限に近いのであります。話の種類も従って無限であって欲しいのです」とあるように、明治人の何にも遮られない好奇心、学びたい、語りたいたいという素朴な心性がこの地域で多くの文化人を育てた。長興寺で柳田國男が話したのは、江戸期の民俗学の先人、菅江真澄すがえますみに関する事だった。旅人の真澄がこの寺にしばらく滞在、土地の人々と親しく交わったことなどが語られただろう。「話をきく会」に招かれた講師は他に折口信夫しんむらいずる、新村出、金田一京助、

渋沢敬三、武者小路実篤かむひがしへきごとう、河東碧梧桐と錚々たる顔ぶれだ。

松本市美術館の小さなコーナーでは開館以来、文人池上喜作が蒐集した近代文芸資料、美術、工芸作品の「百竹亭コレクション」を展示している。その主軸となるのは明治文学の巨人正岡子規だ。子規文学が生涯の精神的生活の支柱を培ってくれたという喜作だが、少年期より子規に傾倒、コレクション中には子規が描いた「藤娘図」がある。以後、子規の弟子、縁者たちを次々に松本に招き、また通信を交わして全国規模の文化人ネットワークが構築された。

今秋、松本市美術館では池上喜作と特に縁が深かった明治期の金工家、香取秀真展かとりほつまを開催する。秀真は金工の専門の他に、正岡子規門下の歌人という顔も持っていたのだ。

(おがわみのる 松本市美術館館長)